

(書評) 永末十四雄著『日本公共図書館の形成』日本図書館協会, 1984

評者 埜上 衛(近畿大学)

本書は、明治維新から敗戦までのわが国の公共図書館の通史とあってよいであろう。そうした性格のものとしては、最初の成書のはずである。(石井敦『日本近代公共図書館史』は都立中央図書館報『ひびや』, 同『日本近代公共図書館史の研究』は論文集, 国立教育研究所『日本近代教育百年史』の中の関係編も成書ではない。) 最初で、A4・352 ページの大冊、質も以下に考察する通り長所に富み、画期的といえる。著者の努力に敬意を払おう。もちろん、著者をはじめとして、先行論稿があるが、わが国で最初の通史となれば、長所とともに若干の短所もある。以下、主題、構成、事実にかけて全体を考察しよう。

主題: 著者は「序」の始めて、「日本資本主義の後進性にもとづく社会経済の発展の不均衡によって、わが国の公共図書館形式は自ずから独自の経過を辿らざるを得なかったのである。本書は欧米とは成立基盤が異なり、したがって固有の態様と特質によって日本公共図書館ともいうべきわが国独自の公共図書館の形成過程を主題とする」(p. 3) という。著者は、カッコつきの日本公共図書館という概念を用いているものと考えらるべきであろう。続いて「形成過程」が記されるが、「日本公共図書館」の内容構造、その公共図書館との関連のし方、成立の時期などは、明確になっているとはいえない。私は、「形成過程」のなかで述べられている次の文章にひかれる。「戦前の図書館は今日的水準とは比較にならぬが、それでも住民の自発性に依拠しなければ設立と維持は困難であった。国民教化のきびしい枷をはめられながらも図書館は住民の教育にたいする願望と読書意欲を反映するものであり、・・・民主的伝統は時と所を変えながら地下水のように涸れずにあつたこともしることができる」(p.5)。

公共図書館とは民衆の要望を尊重する公開の図書館と私は考えるが、ここに引用した文章の図書館はまさにこの公共図書館である。(なお、著者は普通図書館を教化的という(p.4)が、これは元来は“Popular Library”の訳で公共図書館のひとつと思う。)「日本資本主義の後進性」のえいきょうは何か。このような公共図書館に対する社会・国・地方半自治体の冷遇(公立の遅滞・形骸化、図書館

員の低待遇)、教化的利用、それらに伴う公共図書館理念の混迷化、結局貧困と歪みであり、特に過半数の国民が住んだ町村におけるその激化である。著者は、これを追求し、最後の第6章で戦時の公共図書館荒廃に致っている。著者は、この明暗両面ともに目を配っている。第5章までの各章は、この明暗両面がジグザグしながら、トータルにはともかくも公共図書館の前進・形成をしめしているように思われる。私の読後感には、「日本公共図書館」よりは、「日本における公共図書館」の形成(いずれにせよ後進国的な)の方が近い。

それは、通史ということになる。書名は、『日本初期公共図書館史(あるいは、史を形成と換える)』ではどうだろうか。この主題の通史の成書はない。このような気持が私をそうさせたのかも知れないが、そのつもりで読むと、社会経済史をよくとりいれたかなり優秀な通史を得たと思え、著者に感謝し労を多としたいくなる。かなりとは、ひとつは著者がその立場から取り上げなかった若干の私立図書館などがあるためで、本来ないものねだりである。もうひとつは、本書の記述に部分的な混乱をかんじるため、これは、次項で述べる。

構成:本書は6章に分かれる。この6章の構成方法は、序の「形成過程」から察知されるが、章名に対応して著者の文を抄出しよう。第3、第6章は、公共図書館の形体・運営を規定する政策の類で他章と趣きが異なるから、()を付した。

第1章「公共図書館の萌芽」— まず制度の摂取と、試行型態としての公立書籍館、自由民権運動による書籍縦覧所の設立運動に端緒的段階がもとめられる。

第2章「通俗図書館の創設と府県立図書館の設立」— [前章の萌芽現象が]いずれも当時の政治的・社会的状況に制約されて衰退するが、地方自治・教育制度に対応して法制的な整備と公共図書館理念の摂取消化がすすめられる。

(第3章「図書館普及の契機としての諸政策の展開」— 日露戦争後は、社会問題の発生とともに自由化傾向を生じ、および反体制的な社会運動の台頭をみると、政府は過敏に反応して、いっそう国民統合を強化する教化対策を重視した。)

第4章「市町村図書館の普及とその設立形態」— 日露戦後に図書館数は着実に増加の趨勢をみるが、・・・道府県立・市立図書館など都市図書館と町村の簡易図書館とでは、・・・学校教育制度の複線型と対比されよう。

第5章「道府県立図書館と町村図書館」— 体制的危機の進行とこれに対処する国民教化の再編制強化は図書館の立場をますます不利なものとし、成長発展の

途を閉ざされて運営の硬直化をまねいていった。

(第6章「図書館令改正と国家統制の強化」— 戦時体制下において国家と公共図書館との関係は原理的な矛盾をふかめざるを得ないが、これを弥縫し権力に迎合しながら活路を求める懸命の努力は、喜劇の様相を呈する故にいっそう悲劇的である。)

先の、主題と章構成方法の解説は、序章を設けて行うべきであった。第1章の挫折したものを別として、第2、第4、第5章に現れる公共図書館は次のようになる。

地域的	— 県の図書館	市の図書館	郡・町の図書館	村
機能的	— 参考図書館	参考図書館	通俗図書館	通
	モデル図書館	通俗図書館		
設立者	— 県立図書館	市立図書館	郡・町立図書館	村
	県教育会図書館	市教育会図書館	郡・町教育会図書館	
		個人図書館 社寺図書館	同 左	同
		組合図書館		
		青年団図書館など		

設立者の最上欄は公立、その下は私立である。本書は公共図書館の生長をたどる各章で、公立増加だけでなく、通俗と参考、私立、県立、郡町村と市、など各館に気を配っている。これは、通俗と参考とのたいひ、図書館協力・援助における県立の役割という現代的課題、私立の強さ・弱さ、公立の強さ・弱さという時代的課題に基づき、基本的に正しい。各章を次のように要約できよう。

第2章—明治20年から40年代—通俗図書館出現(主に私立)、県立図書館出現(宮城とも17館)、「図書館管理法」、佐野友三郎。

第4章—明治30年代後半から40年代—郡町村の図書館の増設(地方改良運動の影響、私立が主、零細化の開始)、市の図書館の増設(公立と私立)

第5章—大正から昭和戦前—県立増設(22館)、町村立増加(各県設立奨励対策の影響)、体制的危機化による圧迫。

第1章では、「2. 公立図書館の萌芽的型態」の(2)新聞縦覧所に「3. 自由民権運動と書籍縦覧所」を続け、ただしその(3)は自由民権運動とやや別であるから同種の読書施設を加え先廻しして2(3)とする。2(3)公立書籍館の設立から(6)までを末節とする。このようにすれば、図書館の早自生を示す

ことなる。政府側も、明治10年・田中、15年・九鬼が通俗図書館に言及しているように、公立書籍館にある程度この線を期待していたと思う。第2章では、「1. 通俗図書館の理念と施策」の(2)地方教育会における読書施設の設置と私立図書館を(1)とし、地方教育令図書館を通俗・公開図書館とみてより詳しく述べられないだろうか。第3章は、第2・4章に互る日露戦後時の経済状勢、政府の地方改良運動、それに関連する図書館奨励などを述べ主に第4章の前提となるが、前後章との関連が説明不足のため、やや混乱を感じる。第4章は、著者が詳しい領域で記述多彩であるが、「3. 町村図書館の設立型態」の(2)教育会図書館は郡を冠し、一部を第2章に廻せばと思う。第5章は、公立図書館成立の主眼の時期である。県立図書館は詳述されるが、町村立は「公私併立から公立優位の時代に転換したかのようであった。しかし、・・・名目ばかりの図書館は私立より公立に多くみられた」(p. 259)とあって、意義を明瞭にするに至っていない。ともあれ、昭和9年の4,793館でピークに達した(p.249)。第6章は、公共図書館にとり暗黒時代にあたる。昭和8年の図書館令改正、それに続く9年の附帯事業論争、9から12年の図書館社会教育調査報告、14年からの図書群や国民皆読運動が取り上げられている。これらは、一応形成された公共図書館にふりかかった危機に対する、館員のあえぎもだえである。この扱い難い時代の視点を、著者はよく選んでいる。

事実：田中不二麻呂を長とする文部開明官僚の公共図書館施策には従来研究があるが、本書第1章の「1. 近代図書館制度の摂取過程」(2)文部省書籍館の設立から(5)東京図書館への改組とその運営は、よくそれらを取り入れている。本書随所で、文献参照は豊富である。2の(4)公立書籍館の運営と、(6)公立書籍館の衰退も従来の研究を取り入れているが、貸出をどの程度行って、その影響がどうであったかの考察が充分でない。貸出の記述は第5章(p.236,237)などにあるが、より開拓の必要が残る。(なお、索引は努力されて、貸出の項も8箇所をあげているが、私の作成では少なくとも20箇所ある。)公立書籍館について、宮城県・高知県のもちこたえ、市町村立である英米との相違を一言してほしかった。第4章以下での「図書館沿革」(大正初)や諸館史(県立が多い)の利用はさすがである。第4章に、次の引用がありショッキングである。「露骨に言ふと、農村青年で読書の好きなものは病人か、さもなくば百姓の嫌ひな、不良青

の図書館
俗図書館
立図書館

左

途を閉ざされて運営の硬直化をまねいていった。

(第6章「図書館令改正と国家統制の強化」— 戦時体制下において国家と公共図書館との関係は原理的な矛盾をふかめざるを得ないが、これを弥縫し権力に迎合しながら活路を求める懸命の努力は、喜劇の様相を呈する故にいっそう悲劇的である。)

先の、主題と章構成方法の解説は、序章を設けて行うべきであった。第1章の挫折したものを別として、第2、第4、第5章に現れる公共図書館は次のようになる。

地域的	— 県の図書館	市の図書館	郡・町の図書館	村の図書館
機能的	— 参考図書館	参考図書館	通俗図書館	通俗図書館
	モデル図書館	通俗図書館		
設立者	— 県立図書館	市立図書館	郡・町立図書館	村立図書館
	県教育会図書館	市教育会図書館	郡・町教育会図書館	
		個人図書館 社寺図書館	同 左	同 左
		組合図書館		
		青年団図書館など		

設立者の最上欄は公立、その下は私立である。本書は公共図書館の生長をたどる各章で、公立増加だけでなく、通俗と参考、私立、県立、郡町村と市、など各館に気を配っている。これは、通俗と参考とのたいひ、図書館協力・援助における県立の役割という現代的課題、私立の強さ・弱さ、公立の強さ・弱さという時代的課題に基づき、基本的に正しい。各章を次のように要約できよう。

第2章—明治20年から40年代—通俗図書館出現(主に私立)、県立図書館出現(宮城とも17館)、「図書館管理法」、佐野友三郎。

第4章—明治30年代後半から40年代—郡町村の図書館の増設(地方改良運動の影響)、私立が主、零細化の開始)、市の図書館の増設(公立と私立)

第5章—大正から昭和戦前—県立増設(22館)、町村立増加(各県設立奨励対策の影響)、体制的危機化による圧迫。

第1章では、「2. 公立図書館の萌芽的型態」の(2)新聞縦覧所に「3. 自由民権運動と書籍縦覧所」を続け、ただしその(3)は自由民権運動とやや別であるから同種の読書施設を加え先廻しして2(3)とする。2(3)公立書籍館の設立から(6)までを末節とする。このようにすれば、図書館の早自生を示す

年である。(但し地主の息子は此限にあらず) 善良な少年は決して読書の余裕を持たぬ。又読む必要もない読んでも居らぬ」(p. 140, 大正4年) この考えと教化性過多と新刊不足とでは、公共図書館の育つ余地はなくなる。p.160 から161 山口・福岡県下町村立図書館の家庭巡回袋式貸出(塩見昇「戸塚廉の図書館教育」『学校図書館』273 にも同様例)が記されているが、他にも利用された実例は各図書館史などに見えるはずであり、紹介していただきたかった。第5章冒頭p. 200 の「青年訓練所・図書館(博物館を含む)費推移」もショッキングである。そして、ここでは考え直しの余地はない。ここに見る学校式教育に対する図書館・博物館の軽視は冷厳であり、直視し克服しなければならない。どの章もまともに取り組んであるが、第4章以下は特に著者の熱が感じられた。文章は質実だが、達意であり、現場人らしい、きめ細かな考察も多い。それが、固い内容の読解を助ける。著者には20年余り前、一度お話したことがあり、その後論文を拝見したが、公私多忙の中、再び同じ思いの著書を提示されたことは誠にうれしい。なお、長所・短所ともに言い落としがありそうである。日本近代公共図書館史の研究は進んで来たから、本書が多くよまれて、本書に対する賛否・補充が出て(本書評にたいするそれらも)、著者に意見もうかがって、共有財産が構築されうことを願ってやまない。

(受理 59年8月20日)

図書館史を考えるセミナー(第2回)は、9月2, 3日の両日、東京赤坂のアジア会館で開催した。第一日目の参加者は44名、第二日目は38名で盛況であった。

第7回 運営委員会報告(9月3日, アジア会館, 午後8時から10時)

* 新入会員(59年7月1日以降)

* 会費払込状況 昭和59年9月10日現在

会員数 127名(9月10日 現在)

会員数 127名

払込済み113名

会費未納者14名については、いま一度振替用紙を同封することにした。そして

9月末日までに会費が届かない場合には、退会したものとし、こんごニュースレターを送付しないこととした。

- * なお、運営委員会では、「図書館史研究」(第二号)の編集方針、60年度図書館史セミナーの開催地などについても検討した。詳細は次回のニュース・レターで報告する。ここでは、第二号の募集要領だけをしめしておく。

「図書館史研究」(第二号、昭和60年8月刊行予定)の原稿を下記の要領で募集します。

- A. 欧米の図書館史に関する論文
- B. 400字づめ原稿用紙(横書き)30枚から40枚
- C. 提出期限 昭和60年3月末日
- D. 送付先

図書館情報大学内 寺田光孝

ふるって力作をおよせ下さい

- * 運営委員会の出席者: 岩猿敏生, 森耕一, 阪田蓉子(以上 関西)
山口源治郎, 川崎良孝(以上 中部)
小川徹, 中林隆明, 常盤繁, 河井弘志, 工藤一郎(以上
関東 セミナー検討委員会)
石井敦, 寺田光孝, 鮎沢修(以上 関東 編集委員会)

- * ニュース・レターに掲載する図書館史についての短い原稿を募集しています。

- | | |
|------|-------------------------------------|
| 内容 | 1. 単行書の書評 |
| | 2. 資料紹介 |
| | 3. 海外文献の紹介や論評 |
| | 4. 論文の紹介と論評 など |
| 投稿規定 | 1. 枚数 横書き原稿用紙12枚以内 |
| | 2. 送付先 椋山女学園大学(事務局) |
| | 3. 原則として、送付された原稿は、次回のニュース・レターに掲載する。 |

(文責 川崎良孝)